



詩集「略歴」より「村」

ほんとうのことをいうのは…いつも
はずかしい。

伊豆の海辺に私の母はねむるが。…少
女の目…村人の目を盗んで…母の墓を
抱いた。

物心ついたとき…母はつごくことなく
そこにいたから…母性というものが何
であるか…おぼろげに感じとった。

墓地は村の賑わいより…もっとあやし
く賑わっていたから…寺の庭の盆踊り
に…あやうく背を向けて…ガイコツの
踊りを見るところだった。

叔母がきて…すしが出来ている、とい
うから…この世のつきあいに…私はさ
びし人数の…さびしい家によばれて行っ
た。
母はどこにもいなかった。

石垣
りん

りんさんが亡くなる二、三年前、母の墓をほんとに抱いたか聞いた。「抱いた。」「物事を二重に見るくせがある。」とも言われた。知性と感情が豊かな少女であった。

「母はうごくことなくそこにいた…母性というものがなんであるか」 したわしいものであり、永久に動かないで続くものである、ととれる。りんさんの詩は意味が深く、哲学的です。

こながやげんじ
(小長谷源治・現代詩人会)

「あんなに」

子供のとき伊豆半島の船旅をした。
南端の石廊崎を通過する際
三つ四つとんがりのある養掛岩を沖合
から見た。

素晴らしい眺めだった。

あれから半世紀

昨秋羽田から徳島へ行く飛行機が大島
上空にさしかかるころ見えた！はるか
にあの養掛岩が。

私の過ぎた月日は

海と空のへだたりに消えたのだろ
うか？

高度四千メートル、光の中で思った。



石垣りんさんと、りんさんの母
が眠るお墓（子浦：西林寺）